

序文

薬物治療に関わる薬剤師には、薬物の薬理作用と作用機序、薬物動態、安全性などの薬理学的知識はもとより、疾患の病態や症候、臨床検査・診断、そして非薬物治療も含む治療全般についての知識が求められるようになった。これらを修得することにより、調剤、服薬指導、処方設計の提案などの薬学的管理の基盤を築き、医薬品を安全かつ有効に使用することが可能になる。

本書は、《臨床薬学テキストシリーズ》の「薬理・病態・薬物治療」の各論を構成する一冊であり、1) 循環器、2) 腎・泌尿器、3) 代謝、および4) 内分泌の四つの領域を対象とする。薬学教育モデル・コアカリキュラム（平成25年度改訂版）との関係では、「E2 薬理・病態・薬物治療」のうち、「(3) 循環器系・血液系・造血器系・泌尿器系・生殖器系の疾患と薬」および「(5) 代謝系・内分泌系の疾患と薬」に該当する。ただし、血液系・造血器系の疾患と薬については『血液・造血器/感染症/悪性腫瘍』で、生殖器系の疾患と薬については『消化器/感覚器・皮膚/生殖器・産婦人科』で取り扱われる。これらの系に作用する医薬品および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得することが求められる。

医療の高度化の進展、社会の超高齢化など、薬学・薬剤師を取り巻く環境が大きく変化している。極端な高齢社会を迎えつつある日本においては、慢性疾患を抱える高齢者への対応が喫緊の課題となっている。日本における死亡の原因となる疾患の第1位は悪性新生物であるが、第2位は心疾患、第3位は脳血管疾患である。1960年代には、脳血管の死亡率が第1位であったが、脳卒中对策や生活環境の改善により1970年頃から死亡率が減少し、1980年頃には悪性新生物が第1位となり、1996年頃には心疾患が第2位となった。心疾患も1990年頃から徐々に死亡率が下がっているが、脳血管疾患の死亡率の減少ほど顕著ではない。本書で取り扱われる領域は、直接あるいは間接的に心疾患と関わるものが多く含まれる。内科系の診断および薬物治療が急速に進展する現代において、生命維持の根幹をなす循環器系、腎・泌尿器系、代謝系、内分泌系の医療薬学領域の最新のトピックスを含む多くの知識を修得し、患者の生命を救うことに貢献できる医療・薬物治療の担い手を目指していただきたい。

本書は、臨床的な記述を充実させるために、薬学者のみならず、第一線で活躍中の医学側執筆者との共同作業によって生み出されたものである。難解と思われる医学用語や関連する知識などはサイドノートでご説明いただき、最新のガイドラインの内容や近年導入された新薬、そして多数の構造式も盛り込んでいただいた。編集に際しては、新潟薬科大学の上野和行生のご協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

2019年11月

赤池昭紀